
我が家のお姫さま。

樹林

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が家のお姫さま。

【著者名】

N14370

【作者名】

樹林

【あらすじ】

俺に妹ができました！しかもブロンドヘアでグリーンの瞳をするイギリス人！？さらに同姓！？

登場人物

桜坂 一樹
さくらざか いつき

この話の主人公。両親と妹が仕事の都合で海外に住み、一人日本に残った高校二年生。人付き合いが上手く男女関係なく友だち多い。梨花と心とは幼馴染。

桜坂 ジュリン
さくらざか ジュリン

訳あって一樹の妹（義理）になり、訳あって一樹と同姓した美人な子。男性があまり得意ではない。それでも一樹には心を許している。

木元 梨花
きもと りか

一樹と心の幼馴染。一樹の一人暮らしが心配で、親を何とか説得して一樹の隣の部屋に住む高校二年生。

春木 心
はるき こころ

一樹と梨花の幼馴染。

プロローグ

高校一年の夏休みに入り、気分も最高潮で迎えることができた。一年生の頃は補習やなにやらで、他の人よりも夏休みに入るのが結構遅かつたけれど、今回は登校日を除けば学校に行くのをばぶけ家でゆっくりできる。だけど毎年特別なイベントもある事無く、宿題を早く終わらそうと思っても毎年のことながら終わることもなく、三日前ぐらいから宿題を始めるようと思う。そう思うと気が進まない。それでも宿題をしない訳にもいかないのが学生だ。

そんなことを思いながら既に、夏休みの半分に差し掛かった。もちろん宿題は一つも手をつけてない新品同然だし、人生を覆すイベントも無かつた。だけど仮に人生を覆すような事が起きれば、それはそれで問題なのだけれども。何事も普通が一番つて事だ。

そして俺は一人寂しく冷房が付いている部屋を拠点として、ソファに身を任せリラックスした状態でテレビを見ている。そんな時に突然聞きなれた携帯の着信メロディーが部屋に響いた。

誰だろう？　俺はそう思い携帯に手を伸ばして液晶画面に映つている番号を見る。そして、その番号は父さんの番号だった。

父さんと母さんと妹の真帆は今会社の都合上イギリスで暮らしている。本当なら俺も今頃はイギリスで暮らしているはずだったが、どうにも住み慣れた土地から出るのは抵抗があるため、一人さびしく日本に残つた。決して英語が喋れないわけではない。転勤が決まつた途端に猛勉強をしたため、多少の英会話なら問題なくできると思う。……たぶん。

そして俺は父さんからの電話を出す。

「もしもし？」

『よつ、一樹。元氣にしていたか？』

「それなりに。それより久しぶりに電話なんかして何か用か？』

『いや、ちょっと一樹に喜ばしい報告があるんだが、聞きたい?』電話越しにでも俺の反応を楽しみにしていると分かる口調だった。ここで「別に」と言つて電話を切ることもできるが、俺はそこまで捻くれた性格はしていない。

「ああ、聞きたい」

その代わり棒読みで答えた。

『そうか、そうか。そんなに聞きたいのか、なら特別に教えてあげようかな』

その後父さんは驚くなよと言つた。だけど俺は何を言われても驚く自信がない。それは父さんが驚くなと言つた時の内容が何時も驚く程のレベルじゃないからだ。この前は真帆に友達が出来た事について長い時間聞かされた。だから俺はワクワクもしないし、無論ドキドキもしない。それどころか通話料の方が心配だ。

やれやれ、親バカというか何というか……。

『……なんと! 一樹に妹ができました!』

それと同時に拍手の音も聞こえてきた。

そして父さんの期待を裏切ることなく俺はかなり驚いた。口には出さなかつたけど、きっと今の顔を鏡で見てみればとんでもない表情をしていると思う。そして父さんから『驚いたか?』と言う声が聞こえたような気がしたが、驚きのあまりはつきりと聞き取れなかつた。

「……えっと、俺に?」

そして動搖している俺はなぜかもう一度聞き返す。父さんは嘘を言う人じゃないけど、これを聞き返さない訳にはいかなかつた。

『そう言つているじゃないか』

「なら出産予定日はいつ?」

妹が産まれたからといって俺が時下に妹を見るのは産まれてから当分先だと思う。それでも聞いたかつた。だって自分に妹が出来るのに産まれる日が知らないのは変だから。

『残念だけどもう産まれちゃつた。テヘ』

最後に『テヘ』なんて言う人を生まれて初めて聞いた。しかも聞いたのが俺の父親だから残念と言うか悲しいと言うか、実の父親にガツカリだった。だけどそんな事より父さんは『もう産まれた』と言った。そっちの方が産まれるまで俺に何も言わなかつたからガツカリなのだけれども。

「どうして今まで俺に何も言つてくれなかつた？」

だから父さんに問う。もしかしたら言つてくれなかつた理由もあるかもしない。まあ、返事次第では今後の父さんに対する接し方が正反対になる。もちろんそれは悪い意味で。

『ん？　だつて妹が出来たけど産む訳じやないからね～。テヘ』

俺の聞き間違えじやなければ産む訳じやない、そう言つた。正直俺には父さんが何を言つているのか理解できなかつた。妹ができるのに産まない。それはいつたい何を意味するのだろうか？　そんな疑問があつた。そして父さんは再び『テヘ』と最後に付けた。俺としてはこつちの方が少々気になつたり気にならなかつたりする。どつちと言われば、きっと俺は両方と答えるだろう。全くの矛盾だけど、両方なのだから仕方が無い。それに俺としては最後に『テヘ』なんて付ける人が自分の父親にかなりの衝撃を覚えた。短い生涯で一番の衝撃だ。こんな事を言う父さんは日本中探してもごくわずかだろう。それはそれでレアなのだけれども、正直のところ嫌だ。もしこんな父さんが授業参観にくれば俺の心に一生のトラウマが出来る事を保障してもいい。

「全く父さんの言つた事についていけない。……からかいたかつただけ？」

もし父さんの言つている事が理解出来る人がいるなら俺に説明してほしいぐらいだ。お礼に父さんを譲つてもいい。

『誰もお前なんかからかわんわ。ちょっとした理由がある。だけど一樹に妹ができたのは本当だからな』

そして意味の分からぬまま父さんは真剣モードに突入した時だけだ。だけど父さんの口調が変わるのは真剣モードに入りした時だけだ。だけど父

さんが真剣モードに入るのはプレミアがつくぐらい珍しい。多分一番最近でも年単位前だつたと思う。

「その理由とは？」

そこで父さんは小さく咳をつき、

『いろいろと省かせてもらうが、父さんの友人が事故にあつた。それだけならまだしも不幸にも亡くなつてしまつた。その父さんの友人には娘が一人いるんだが、引取り先がみつからなくて友人である父さんが引き取つた。こつちで一人とも面倒をみたいのはやまやまなんだが、こつちにも色々と事情があるから娘の一人はそつちに行くから一樹にその子の面倒係りを任命した。当たり前だが拒否権はないからな。それで質問はあるか？』

久々に父さんから真面目な話を聞いたし、さつきの父さんが言ったことも納得がついた。

『……そう。別に俺は断らないから任せてくれ。だけど食費はビリする？ 今は俺一人分でギリギリだけど？』

『それなら問題はないぞ。少し多めに仕送りをするから心配するな』
『こもつともな事を言つてきた。もしいつもの父さんなら『一樹なら何とか出来るだろ』とか何とか言つてきそうだ。もちろん冗談でなんだけどね。』

「その子の歳と性別は？」

『歳は一樹と同一年だ。一応誕生日が一樹の方が早いから一樹の方が年上で、お兄ちゃんだ。それから性別は妹だけあって女性だ。しかもかなりの美貌だから期待しても損はないぞ。後、名前はジユリンちゃんね』

そして俺はその後も何個か質問した。そして父さんは俺の質問をできる限り明細に答えた。

一通り質問が終わつた所で、父さんから妹であるジユリンの来日する口を聞いて驚いた。それはかなり急で、今日の最終便で来るようだつた。俺は父さんに呆れながらも話を聞く。

『それじゃあ、最後に一つだけ言つとくぞ』

「なに?」

『ジユリンちゃんを襲うな』

父さんが話している途中で俺は電話を切った。それから携帯を置き、部屋の中を見渡して掃除を始める。それからジユリンの部屋を作るため、倉庫扱いしている部屋を綺麗に掃除してジユリンの部屋を確保した。

九時頃に着くといわれたため間に合つようバイクで空港に行き、顔も知らない妹を迎えに行つた。

最終便がきたが、俺はジユリンの顔を知らないためただ待ついたら、綺麗な外人の女性が俺の前にきて丁寧にお辞儀をしてきた。だから俺もお辞儀を返す。そして父さんの言ったことも納得した。それはジユリンの美貌だった。髪の色は綺麗なブロンドヘアで、瞳も澄んで綺麗なグリーンだった。そして顔に付いているどのパツも整つており、肌の色も雪のように白い。だから俺は妹と忘れて数秒見惚れてしまった。

こんな美人な子とこれから長い事一人暮らしだと考えるだけで妹との一人暮らし楽しみ半面、緊張したりしないだろうかと思う気持ちが反面あつた。だけど一つ言える事は今後の生活が華やかになる事だった。

第一話 一人だけの部屋

妹のジユリンと一緒にバイクで俺が住んでいるマンションまで走らせた。空港からマンションまで結構距離があるため、一時間ほどバイクのシートに座っていたから、少しお尻が痛かった。だけどそれ以上に、かなりの美貌の持ち主であるジユリンが後ろに乗っている事に緊張してしまったのか、ジユリンから離れるまで痛みは感じなかつた。

それから緊張によるものか、はたまた何を言つていいのか分からぬのか、無言でジユリンの荷物を俺が持つて一緒に俺が住んでいる部屋に向かつた。

自分の部屋に向かつている途中にマンションに住んでいる住民と何度かすれ違つた。住民はその度に見惚れるように立ち廻りしたり、頬を赤らめて俺の隣を歩いているジユリンを見たりと、分かりやすい反応を示していた。だけど誰一人として俺達に話しかけることは無かつた。きっと俺も同じ立場に立てばそうなると思う。だって話しかけても良い返事が返つてくるとは思わないからだ。それはジユリンの性格が悪い、そうとは思つては無い。ただジユリンの笑顔が作ったもののように感じるからだ。

自分の部屋に着いたところで鍵を開け、部屋の中に入つた。そしてジユリンも俺の後に中に入る。それから短い廊下を歩き、直そこにあるドアを開け、居間にに入る。

とりあえず居間の真ん中にあるロングソファの上にジユリンの荷物を置いた。それからジユリンに手招きして、今日の昼に掃除をした部屋に入る。その部屋にはベッドも無ければ机も無い、ただの空き部屋としか言えない部屋だ。

『えつと、まだ荷物が届いてないけど、一応この部屋を使ってね。

今日は俺の部屋にあるベッド使つてください』

俺がそう言つと、ジユリンは小さく頷くだけだった。今日始めて

会い、そして今に至るまでジユリンの声を一度も聞いていない。どんな声かは気になるけど、無理には話してくれなくてもいい。だって今のジユリンは悲しい気持ちでいっぱいだと思うからだ。

それから居間にある掛け時計見れば、もうじき十時半頃だった。
『そりいえばお腹は空いていない？ もし空いているなら何か作りますよ？』

ジユリンはさつき同様に左右に首を振った。

『そう、なら今田はもう寝ます？ 長旅で疲れたでしょう？』

そしたらジユリンは小さく頷いた。だからジユリンを俺の部屋に連れて行き、俺は机の上に置いてある携帯電話だけを持ち『おやすみ』とだけ言つて部屋から出た。

俺は居間で寝ようにも、時間が時間のため眠りにつくことは出来なかつた。だから俺は幼馴染である梨花の部屋にお邪魔しようと思ひ、携帯で梨花に電話をかけた。ちなみに梨花の部屋は俺と同じマンションの隣で、俺が一人暮らしをすると知つた時に、俺が一人だと心配だと言つて梨花も同じマンションで一人暮らしをしている。その時に、実家から近いのにお金の無駄だとか、何かあつたら心配だとかで両親と相当な口論をしたらしい。

何度か呼び出し音が鳴り、何度目かで梨花が電話に出てくれた。
「もしもし、梨花？」

『うん、どうしたのいつちゃん？』

携帯の向こうから聞きなれた綺麗な声が聞こえてきた。そして俺の事をいつちゃんと呼ぶのは、梨花を含めて一人しかいない。一人は梨花で、もう一人は実の妹である真帆だけだ。

「今からそっちに行つてもいいか？」

『うん、いいよ。だけどどうしたの？』

『いや、ちょっとな。それじゃあ、今から行くから。またな』

そう言つて俺は通話終了のボタンを押した。

それからメモ用紙に『友達のところに行きます。もし何かあつたら電話してください』と、俺の携帯番号を書いたメモ用紙を机の上

に置いておく。

玄関で靴に履き替えて、梨花が住んでいる隣の部屋に向かった。

直隣の部屋には数秒で着き、呼び出し音のチャイムを鳴らした。その後に部屋から物音と共に、部屋のドアが開かれ、そこから俺のよく知っている梨花が出迎えてくれた。梨花は少し長めの髪を自然に垂らし、大きな瞳と全体に整つた可愛らしい顔にマッチしている可愛らしいパジャマ姿だった。

「こんばんは、いつちゃん。ほら、早く中に入つて」

少し棒立ちだつた俺の腕を引いて、俺は梨花の部屋に入った。

俺と梨花の部屋の内装は一緒だ。だけど俺の部屋とは似ても似つかないほどに綺麗に整頓されていて、居間なのに女の子の部屋と一目で分かるほど可愛らしい部屋だ。

「梨花の部屋に入つたのは久しぶりだな」

そう言いながら俺はじゅうたんの上に座つた。

「うん、そうだね。いつも私がいつちゃんの部屋に行つているからね。それはそうと、今日はどうしたの?」

梨花はそう言いながら冷えたお茶が入つたグラスを一つ持つて、机の上に置いてから座つた。

「ありがとね。今日は梨花には言わなきやいけない事があるんだ」「言わなきやいけない事?」

そして梨花は少し首を傾げた。その仕草が似合つのは俺が知つている中では一番だと思うほど似合つているのだ。

「今から言つ事を信じられる方がおかしいが、それでも信じてほしい

い

「うん、信じるよ」

まだ何も言つていないのだけど、梨花は笑顔で答えてくれた。

「えつと、せめて俺が何か言つてから信じてくれないかな? あれですか、俺の事ばかにしているのか?」

「違うよ、私はいつちゃんの事信じているからだよ」

その予想外の発言に嬉しく思えた。

「あ、ありがとう」少し照れながら言った。そして続けて「それじゃあ、本題に入るぞ……実は俺に妹ができたんだよ」

「妹さん？」

「ああ、だが、これが普通の妹じゃないのだよ。ブロンドヘアでグリーンアイのイギリス人なのだよ、これが。しかも、これがまた超美人なんだけど、いまだかつてその子の声を聞いたことが無いのだよ。いつたいこれは如何してだと思う？ 父さん曰く、よく話す良い子つて話だつたんだけど、それは嘘なのかな？ それとも今までに俺が何か不味いこと言つたのかな？ だけどさ、一応今までに言つたこと覚えているけど、何一つ変な事を言つた覚えが無いんだよ。それなら俺の第一印象が变だつたのかな？ ん～、だけど第一印象と言つても俺は特に何もしてなんだよな？ そういうことは第一印象じやないのかな？ あつ、もしかして残念な事に俺の事全てにおいて受け付けないつて事なのかな？ それだと、これから的生活どうしたらいいのかな？ つてか、梨花聞いているか？」

かなり俺の事を呆然と見ていたから聞いてみた。その後に梨花は顔の前で、手を交差する。

「うん、ちゃんと聞いていたよ。ただ、こんなに沢山一気に喋つたいちちゃんが久しぶりだつたから、つい」

そして梨花は懐かしそうに手を細めた。

「そうか？」

「そうだよ。それよりも話は大体分かつたけど、いつたいいちちゃんは妹さんとどうしたいの？」

「どうつて言われても……やっぱり一緒に住んでいるからには仲良くなはしたいよ。だけどさ、中々上手くいかないんだよね、これが『ジユリンの事を気にならないと言えば嘘になる。俺としては気軽にお話したいし、ジユリンの気持ちを全部とはいかないけど、知りたいと思つている。それにこのままだと、一応兄としては不味い気がするからだ。

「だけどさ、直に仲良くなれる訳でも無いから、時間をかけてゆっくりと仲良くなればいいんじゃないのかな？」それにつちやんの事をつと悪くは思つてないと思つよ」

「どうしてそう思つんだ?」

「なんとなく、そう思つんだよ」

「なんとなく?」

「うん、なんとなく。だけどさ、女の勘つて結構当たるんだよ」

そして梨花は笑みを見せた。

「……そうだよな、別にこんなに悩むことは無かつたんだよな。うん、ありがとう梨花」梨花にお礼を言つて、俺は立ち上がつた。そして玄関に向かつて歩き出す。だけど、俺は玄関に通じるドアの前で立ち止まる。「なあ、梨花。もしまた何かあつたら相談に乗つてくれないか?」

「うん、私はいつでもいつちゃんの相談に乗るよ。だつて私にとつていつちゃんは大切な人だから」

どこか意味ありげな事を言われた気がしたけど、俺は特に気にはしなかつた。

「ありがとう」

そしてドアを開けた。後ろから「頑張つてね」と聞こえたけど、俺は何も言わないで玄関で靴に履き替えて、ドアを開けて隣の自分の部屋に戻つた。

自分の部屋に入り、玄関のところで嗚咽まじりの泣き声が聞こえてきた。俺にはその声がジュリンのものだと直に思つた。だつて両親を亡くして、一人で何も知らない異国之地に来たのだから。

俺は直に靴を脱ぎ、そして居間に通じるドアを開けた。案の定そこにはジュリンが居た。ソファに座りながら顔を手で覆い、暗い部屋で月明かりだけがジュリンだけを照らしていた。そして頬を流れる涙が月明かりで宝石のように輝いていた。

その光景を見て俺は一つの事を確信した。ジュリンは寂しがりや

なのだと。だからこそ、俺が今からとる行為は一つしかなかつた。
あまり足音をたてないで、ジユリンが座るソファに歩んだ。そしてジユリンの顔を見上げるよつて床に座つた。

『どうしたの？』

出来るだけ優しく言った。

ジユリンは少し体を震わせ、顔を覆つている手を退けた。そして手で涙を拭つて、無理やり笑顔を見せてくれた。だけどその笑顔が無理に作ったもので、今にも泣き出しそうだった。

『無理に笑顔を見せないで、泣きたい時は泣いてもいいんだよ』

そう言いながら、右手でジユリンの頬に触れる。そして親指で優しく田元を拭つた。

ジユリンは俺の手の上に自分の手を重ね、その後に大粒の涙が頬に流れた。それがきつかけなのか、小さく声を上げて泣き出した。

『……あ、あり…がとう…い、一樹…さん』

ジユリンは泣きながらも俺に言つてきた。だけど、静かな部屋じゃないと聞こえないほど小さな声だった。それでも俺にはしつかりと届いた。ジユリンの姿に合う綺麗な声が。

そしてジユリンは俺の胸に飛び込むように抱きついてきた。

ジユリンの涙で服が濡れただけ気にしなかつた。

『……うん』

それからジユリンは沢山の涙を流して、泣きつかれたのか俺の胸元で寝てしまった。泣いて気持ちがスッキリしたのか、寝顔は少し笑みを見せていた。その笑みは作りものでも何でもない心からの笑みのように見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1437o/>

我が家のお姫さま。

2010年10月8日11時49分発行